

日本海の飛島と粟島およびその周辺の船と港

会員 福富 廉

日本海に浮かぶ飛島（山形県）と粟島（新潟県）への渡島を一番の目的に秋田から新潟まで日本海沿岸を旅してきたので、レポートしてみたい。いつものことながら、フェリー乗船以外に、船に関するあらゆるものを見てこようというのが旅の主旨である。

1. 高速艇「とびしま」に乗る

東京からの夜行高速バスは JR 酒田駅を經由して終点のさかた海鮮市場前に到着した。ここは飛島へ渡る高速艇「とびしま」の発着地で、バスを降りた客のほとんどは島に渡るバードウォッチャーのようだった。予定の到着時刻が 6 時 30 分で船の出港が 9 時 30 分なので、バスが少々遅れて大丈夫な時間だ。7 時から海鮮市場の食堂が開き、500 円の朝定食が質量ともに素晴らしかった。

天気が良くて、北に鳥海山、東に月山の景色も素晴らしい。時間があつたので、一旦、近くの山居倉庫と港を見て回った後、乗船した。

酒田市営の「とびしま」は双胴の 2 階建ての高速艇で、2 階はオープンデッキで外にいられるので、ありがたい。1 階の後部は貨物デッキになっていて、両方の港に備えられたデリッククレーンで積み込む方式。この日の貨物は軽自動車 2 台と小型コンテナが 1 個だった。

この航路は、平日は 1 日 1 便、夏季の土日祝が 1 日 2 便、お盆等の特定日が 1 日 2 便という構成。酒田港から飛島の勝浦港までは所要 1 時間 15 分だが、このうちの 15 分は最上川を仕切った河口港である酒田港内の航行に費やすので、実質的には 1 時間の航海だ。飛島はそんなに大きな島ではなく、1 日 1 便なので、今回は泊まらずに日帰りにして、滞在時間は 3 時間、島では徒歩で 1 周して、バードウォッチャーの真似事や花の鑑賞、景色を見ながら散策した。



背景は鳥海山。右は港のデリッククレーン



背景は月山



酒田港を出港する「とびしま」

港のそばに館岩（たていわ）という展望台のある岩山があり、そこに登れば多くの鳥を見ることができるとともに、船の入出港があればいい写真を撮れる場所だが、1日1便ではそうすることができなかった。



飛島・勝浦港に停泊する「とびしま」
左は、港のデリッククレーン



「とびしま」の後部貨物デッキと航跡

2. 「フェリー ニューあわしま」に乗る

酒田方面から JR 羽越本線で南下すると新潟県に入ったあたりから右に粟島が見えてくる。割と近く感じるのだが、粟島行のフェリーが出る岩船港は一番近そうなところから電車にするとさらに30分以上先になる。大きな港が造れないところなのだろう。当初は最寄りの JR 岩船町駅から歩いて港に行くつもりだったが、雨天のため手前の村上駅からの乗り合いタクシーを利用することとした。事前予約制で700円だ。

粟島行の船は、「フェリー ニューあわしま」と高速艇「きらら」があるが、高速艇はゴールデンウィークと夏場、およびフェリーのドック期間のみで、フェリーは通常1日1便、夏季の土日と繁忙期のみ1日2便となる。夜間の定係港が数少ない島側の船なので、1日1便の場合は観光客としては2泊しないと観光できないので利用しにくく、土日をめがけて乗船することとした。

岩船港はただっ広い港だが、よく見ると先代の南極観測船「しらせ」のプロペラブレードの展示があったりした。ここも南に向けた長い堤防に沿って入出港する。沖合に海底油田のプラットフォームがあるのが目に付く。船は2019年建造なので新しく、さわやかな感じで気持ちがいい。特に、ブリッジ下の船首に出られるのがなかなかいい。



粟島港を入出港する「フェリー ニューあわしま」



ブリッジ下船首デッキ



粟島港に入港

島に近づくと、港に係留されている「きらら」が見えてくる。1年を通してみると稼働時間は少ないので、ちょっともったいない気がする。島の人口370人に対して、フェリーと高速艇合わせると1回の旅客定員は570名にもものぼるが、コロナ禍以前は、そんなに観光客があったのだろうか。



粟島港に係留中の高速艇「きらら」

この島では先にも述べたように土日の1日2便を利用して午前便で行って、1泊して翌日の午後便で帰った。この間、島内バスや電動レンタサイクル等で島中を巡ったが、その中で、ここにある粟島灯台は海面高さ（265m）と光達距離（23海里）が共に日本で第3位ということで、ここと八幡鼻という展望台に行くのはかなりしんどかったが、素晴らしかった。また、島にある粟島浦村資料館では、島の漁業に関する資料や粟島航路の旅客船の変遷に関する資料等が展示されていて興味深かった。



粟島の最高位に立つ粟島灯台



粟島航路の年表付属の歴代の連絡船の写真、佐渡航路からの転用船も多い



地元でサンパと呼ばれる磯見小舟→

島からの復路、船のデッキに上がると島と本州の間の北寄りの海上に肉眼でも新日本海フェリーのそれとわかるフェリーが南下していた。秋田から新潟に向かう「らいらっく」だ。至近距離で交差することを期待していたが、思ったほど「らいらっく」が近づかず、そのはるか前方を横切った。それと同時に Marine Traffic を見ていたら「あざれあ」が近くにいることがわかり、もやの中、肉眼でははっきり確認できなかったが、双眼鏡ではスクラバー取り付けで特徴的に巨大になったファンネルの同船をはっきり見ることができ、かすかではあるが、2ショットの写真も撮ることができた。こちらは小樽直行なので粟島の外側を通過していたのだ。



粟島沖を南下する「らいらっく」

3. 秋田・山形・新潟、その周辺の船と港

(1) 酒田と鶴岡、北前船

酒田と言えば山居倉庫が有名だが、ここには船を上げるスリップが残されて、小鵜飼船と呼ばれる小型船が展示されており、また、そばには屋型遊覧船も何隻か係留されていた。



山居倉庫傍のスリップと最上川舟運用の小鵜飼船

飛島行の船の発着所の海鮮市場の隣に酒田海洋センターという表示があり、行ってみたら、いわゆる海洋博物館（1971年開館）で無料で入館できた。展示面積が広くて、かなり立派なもので、展示内容も船舶・海洋・漁業・港湾等、多岐にわたり、船の模型なども立派なものが多かったが、ただ、展示内容が古くて、昔、横浜のマリナタワーにあった海事博物館を思わず想像してしまったのが少し残念だった。まあ、今の横浜マリタイム・ミュージアムの壁画も「ソブリン・オブ・ザ・シーズ」と「カーニバル・デスティニイ」から時代が進んでいないものもあるけれど。



左から、飛島フェリーターミナル、海鮮市場、海洋センター（2,3階）



海洋センター2階の船の模型コーナー

これらの施設の先に、日和山公園がある。ここは、北前船の模型や明治期に建てられた木造六角灯台等の海洋関係の施設や、西廻りの北前船航路を開拓した河村瑞賢の銅像等がある。今年、その西廻り航路が開設されて350年ということで、酒田市郷土資料館でも企画展等が行われていた。この資料館では本物の帆が展示されていたのが興味深かった。



北前船の1/2模型、左奥に明治28年製の木造六角灯台

ちなみに、酒田港は北前船の港として有名だが、飛鳥航路の発着する河口港は最上川から堤で隔離され、漁港やマリナー等が点在する旧港で、外側に「飛鳥Ⅱ」や大型船等も寄港する、山形県最大の工業港、ということ今回初めて認識した。

北前船では、鶴岡の致道博物館でも展示が行われていて立ち寄ってみたが、ここでは北前船よりも最上川の川船の展示が素晴らしいのに感心してしまった。



致道博物館（鶴岡）の最上川の川舟

(2) ちょっと秋田、南極観測船、

南極＝南極観測船、というイメージがあって、昔から何かあると興味をもってしまう。以前から、酒田に行くときは、近く(?)の秋田県にかほ市の白瀬南極探検隊記念館に行きたいと思っていた。交通の便も良くなく、規模もそう大きくないところで、オスロのフラム号(アムンゼンの船)博物館とは比べようもないが、アムンゼンやスコット等との極地到達競争、使用船等の展示があり、外には「開南丸」の実物大の簡易模型(遊具)等もあったし、ここでも、南極観測船4隻の模型が並べられていた。今まで、稚内青少年科学館、国立極地研究所、名古屋の南極観測船「ふじ」でも見られたが、他にも揃ったところはあるのだろうか。



白瀬南極探検隊記念館(左)と「開南丸」を模した遊具

「開南丸」のカット模型(上)、南極観測船の模型(下)→



(3) 最上川下り

この地域で有名な遊覧船と言えば、最上川下り。少し内陸側に入りこまなければならないが、行くのは必須と考えていた。ちょうど、JR 磐越西線（奥の細道最上川ライン）がトンネル工事のために長期休止するという直前で良かった。

最上峡芭蕉ライン観光の船は古口港（戸沢藩舟番所）を出港して下流の草薙港まで片道1時間の舟下りで、1日2~3便。途中、3か所の急流箇所があり、ちょっとスリリングだった。コロナ禍が治まってきて、この日も修学旅行生等の臨時便が多数運航されていて、船頭さんの話も少しうれしそうだったが、先の天竜川の事故で規制が強化されたところに、今度の知床の事故でどう影響がでるのか、と心配する話もあった。ちなみに、乗船時に、この時期は側壁と屋根がアクリル板やビニールで覆われているのでライフジャケットは着けなくていい、真夏にオープントップになったら着用必須という話があったのが、ちょっと疑問だった。

航路の途中に仙人堂と呼ばれる船でしか行けないお堂があり、ここの対岸に行くと、最上川で唯一現存する渡し船（最盛期には70か所もあったそう）の標識があり船（最上峡観光開発）も係留されていたが、運行されているかどうかはわからなかった。東北旅客船協会の情報では、さらに上流に遊覧船がもう1つあるようである（最上川三難所舟下り）。



最上川下り、最上峡芭蕉ライン観光「第25 芭蕉丸」



仙人堂の渡し、最上峡観光開発の「義経丸」

(4) 笹川流れ観光汽船

電車で村上に向かっていたら、笹川流れ遊覧船という看板が気になり、その少し後に港に遊覧船が2隻泊まっているのが見えた。調べてみると奇岩巡りの遊覧船があるようで、栗島に渡島した後、スケジュールを変えて行ってみることにした。

乗船は桑川港からで、この時期は朝の9時40分から16時まで1日8便（所要40分）、船は「おばこ丸」と「ゆうなぎ」の2隻で、定員が120名と95名なので、19総トンながら結構多い。ネット予約で朝一番の9時40分の予約をしたものの、他もほとんど予約者無しのように、果たして1名でも運航されるのかどうかと心配していたが、行ってみたら15名程度の乗船者がこの便も次の便もあり、港のお土産屋も活気があったので結構、乗船客はあるようだった。

ちなみに、流れとは、この辺では岸近くまで激しい潮流があり、そのため奇岩ができて景勝地になっている、ということのようだった。途中、船内ではカモメのえさを販売して、一部の乗船客も購入して楽しんでた。



笹川流れ観光汽船の2船（桑川漁港にて）



5代目遊覧船「おぼこ丸」(1997年から)



6代目遊覧船「ゆうなぎ」(2010年から)

(5) 村上市の三面川(みおもがわ)

粟島への渡島拠点の村上市を流れる三面川、昔からサケが遡上する川で、江戸時代に世界で初めてサケの人工増殖が始まった所だそうで、サケの資料館等もある。その資料館の脇に鮭公園があり、そこに川遺産があった。「下渡の渡し舟」というもので、平成元年(1989年)まで人々の生活を支えていたそうであった。



三面川、下渡の渡し舟

(6) 最後に、ちょっと新潟

今回は佐渡へは行かず、新潟港へも行かなかったが、バス待ちを利用して萬代橋のたもとまで行って、ちょっと蛇足なのだが、遊覧船の現況だけカメラに収めた。



「ベアトリス」



「アナスタシア」